そうしているうちに、遠くのほうで、人のさけび声やすずの音が聞こえてきました。農民の一隊がうもれた道の雪かきに来たのだというのです。二人はアキセルをひきだしてくらをおいてそりをつけました。そして、人声のする方角へ、ざくりざくりと馬をすすめました。するとまもなく、夜明けま近の、うすぐらい雪づもりの中に、人と馬との姿が黒く見えてきました。二頭だての馬が六組、雪かき道具をひいて動いているのです。それはちょうど船のへさきのようにさきがとがり、はばが十フィートから十二フィートある、木を組みたてたわくのようなしかけのものです。これをぐいぐいひいていくと、雪がかきわけられ、はねのけられて、かたく氷のかたまった道路がでてくるのです。

その一隊がとおりすぎたあとを、わたしたちは、らくらくとそりをかって、ゆかいに行進しました。ラルスは小鳥のように、にこにこと口ぶえをふきます。こうして一時間とすこしで、ことなく、ウメアの駅舎につきました。

そこには、ラルスの父親がいました。もうすぐ、でかけるつもりで、馬にのるばかりにしていたのですが、ラルスが来たのを見て、わらってむかえ、わたしたちからゆうべのすべてのことを聞いたのち、ラルスの頭へ手をおいて、わたしたちを食事につれていきました。

食事が終えると、わたしは二人に、かたくかたくあくしゅをして、ほかの馬にひかれてラプランド地方へむかってたっていきました。

それから数週間ののち、ストックホルムへかえるとちゅうで、ふたたびラルスの父親の駅舎につきました。その日は天気も晴ればれした、いい日でした。父親は、つぎの駅舎まで、自分でついていこうとしましたが、わたしは、たのんで、ラルスを借りてたちました。そして三時間ばかり、ゆかいに話しながら走ったのち、二人はいくども、さようならをして、永久にわかれたのです。

ラルスは、たった十二の子どもであり、わたしはいうまでもなくおとなです。しかも、わたしは、ほとんど世界中を、めぐってきている人間、ラルスは、じぶんの村から、上下二つの駅舎のあいだをしか、見たことのない子です。

それにもかかわらず、わたしは、ラルスからは、まったくいろいろのとうとい教訓をえました。

もっともっとラルスといっしょにいたら、まだまだ多くの感動をうけとったにちがいありません。

（おわり）